

南檜山地区における歴史遺産、土木遺産をめぐるツアーに参加して

昨年 2005 年 10 月、道南技術士協議会で企画した「新函館市における歴史遺産・土木遺産をめぐるツアー」の第 2 弾として、江差、松前方面の南檜山地区の歴史遺産、土木遺産をめぐるツアー研修が実施されました。



◆研修ツアー概要

開催日時 2006 年 10 月 7 日～ 8 日

研修日程

第 1 日目

厚沢部郷土資料館→旧檜山爾志郡役所→かもめ島・開陽丸と北前船係留杭・村上の井戸→州崎館→旧笹波家→上ノ国勝山館跡→石崎漁港の旧トンネル式出入口→松前・矢野旅館泊

第 2 日目

松前福山城→松前郷土資料館→松前波止場→福島青函トンネル記念館→知内郷土資料館

○講 師

菰澤憲吉

函館工業高等専門学校 教授（環境都市工学）

中村和之

函館工業高等専門学校 教授（歴史、人間と文明、科学技術史）

○参 加 者

道南技術士協議会 10 名

はこだて観光情報学研究会 4 名

◆研修報告

① 旧檜山爾志郡役所



北海道指定有形文化財となっているこの建物は、1678 年（延宝 6 年）江戸時代中期、江差地方に自生するヒノキアスナロの伐採取締番所として上ノ国から江差に移転し、その後行政経済を統括する藩府として檜山奉行所となったところである。現存する洋風建物は明治 20 年に建造された開拓史時代の檜山郡役所である。警察署としても利用されたことがあり、取調室や牢屋も復元され、入る？こともできる。

② 北前船係留杭・村上の井戸

江差の北前船交易を支えた施設のなごりが、かも



め島にあるこの係留杭と井戸である。当時、かもめ島の陸側は波浪から船を守るための場所として使われており、係留杭は岩盤に穴をあけ木を打ったもので今でもその木杭が残っている。また、船の出入りが多くなり、飲料水補給を係留場所の近くに確保するため、江差の間屋商人村上三郎右衛門が私財を投じて掘らせた井戸が「村上の井戸」である。当時の北前船の交易を想像することができる素朴だが貴重な遺産である。

③ 上ノ国勝山館跡

北海道に中世の歴史がないと思われがちである。しかし、ここ上ノ国には立派な中世の歴史があった。松前氏初代武田信広が 1470 年頃に築いた山城が勝山館である。1470 年頃というと、1467 年の応仁の乱



など、戦国時代に突入する頃である。(中世とよばれる江戸時代前のことである) 今も発掘が続いているが、現在まで 10 万点ほどの出土品があり、陶器はすべて本州から運ばれてきたもので、その 40% は中国製ということであった。また、鉄製品や銅製品はその当時の最先端技術を駆使したものとなっていたことを考えれば、生活水準や文化水準も高いものであったことが推測できる。

④ 石崎漁港 旧トンネル出入口

1934 年石崎川河口に建設された漁港施設である。船が漁港内と外海を出入りする時に通航するトンネルがとてもユニークであり、全国的にも類例を見ない漁港施設である。設計は北海道庁港湾課長の中村廉次(れんじ)氏によるものと伝えられている。その当時、どのような工法と工程で海の中のトンネル



工事が行われたかなど、現地で想像し話し合ったことなど、さすが技術集団であった。

◆おわりに

ツアー中、上ノ国があるのだから下ノ国があるのではないかと思い、中村教授に尋ねてみた。当然、さらに北にある地方だと思っていたのだが、答えは函館方面であった。なぜか？ その当時、京に上るには日本海航路が一番近いルートで松前・上ノ国の方が函館より京都に近く上なのだ。ちょっとしたことなのだが、まだまだおもしろい歴史や遺産が隠れているに違いない。

講師となっていた葦沢教授と中村教授の解説は、われわれに常に驚きの発見と感動の連続をくださったものでした。昨年に引き続き、誠にありがとうございました。この場を借りて感謝申し上げます。

この研修で道南の技術史の再認識を図り、土木遺産を通じ郷土の歴史を地域に伝えることへの貢献、ひいては北海道の観光資源の発掘につながればと思います。

(文責：道南技術士協議会幹事 奈良 哲男)

